現代南アジア

6 世界システムとネットワーク

秋田茂・水島司——編

東京大学出版会

現代南アジア

❻ 世界システムとネットワーク

秋田茂・水島司——編

東京大学出版会

現代南アジア
⑥ 世界システムとネットワーク

2003年2月20日 初 版

〔検印廃止〕

編 者 秋田茂・水島司

発行所 財団法人 東京大学出版会

代 表 者 五味文彦

113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東大構内
電話 03-3811-8814 Fax 03-3812-6958
振替 00160-6-59964

印刷所 株式会社三陽社
製本所 誠製本株式会社

© 2003 Shigeru Akita, Tsukasa Mizushima, *et al.*
ISBN 4-13-034166-9 Printed in Japan

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは，著作権法上での例外を除き，禁じられています．本書からの複写を希望される場合は，日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください．

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

はじめに……秋田　茂・水島　司　3

第一部　南アジアと世界システム

第一章　イギリス帝国の再編……秋田　茂　23
——軍事から財政へ

はじめに　23
一　一九二〇年代のインド軍とイギリス帝国　24
二　一九三〇年代のインド軍とイギリス帝国　32
三　第二次世界大戦後のインド軍、スターリング残高と脱植民地化　37
おわりに　41

第二章　英印外交・軍事関係の変貌……木畑洋一　45
——脱植民地化と南アジア
一　現代世界史と脱植民地化　45
二　インド独立とイギリスの帝国政策　47
三　軍事体制をめぐる英印矛盾　50
四　外交姿勢乖離の実相　54
五　一九六〇年代のイギリスとインド　57
六　「成熟した関係」へ　62

第三章　「関係の風化」？……B・R・トムリンソン　木谷名都子訳　67
——一九五〇—七〇年の英印経済関係
一　独立後の英印経済関係の弱体化　67
二　脱植民地化とイギリス経済の弱体化　71
三　二〇世紀前半の英印経済関係とその遺産　75
四　「関係の風化」　80

第四章　非同盟主義との遭遇……油井大三郎　87
——一九四七—六〇年の米印関係
はじめに　87
一　インド独立初期の米印関係　88
二　朝鮮戦争の勃発と米印対立の表面化　93
三　米ソの緊張緩和と米印関係の変化　100
むすびにかえて　104

第五章　パクス・アメリカーナとの遭遇と離反……吉田　修　107
——南アジア国際関係の六〇・七〇年代
はじめに——二つの過渡期、世界システムと南アジア　107
一　ケネディ政権とインド・パキスタン　108
二　同盟・再同盟の構図　110
三　米印関係の展開　114
四　米中接近と第三次印パ戦争　122
五　カーター政権と核不拡散問題　127
おわりに——アフガニスタン問題のインパクト　130

第六章　インド外交とソ連・ロシア……清水　学　137
はじめに　137
一　南アジアの地理的条件　138
二　冷戦構造と非同盟運動　140
三　経済的関係　142
四　印ソ特殊関係の推移　144
五　新生ロシアとインド　146
六　アフガニスタン・中央アジア問題　148
七　「ソ連喪失感」と米印関係の緊密化　152
八　ユーラシア・アジア地域の再編成とテロ問題　154

第七章　冷戦後アメリカの南アジア政策……田中明彦　159
はじめに　159
一　冷戦終結後の南アジア認識　160
二　核拡散問題とインド・パキスタンへの制裁　166
三　一九九〇年代の対インド政策　169
四　ブッシュ政権の南アジア政策　172

第八章　アジア太平洋経済圏の興隆とインド……杉原　薫　179
はじめに——貿易結合度から見たインド　179
一　アジア太平洋経済圏の興隆　184
二　インドの輸入代替工業化の特質　190
三　自由化への試みとその挫折　196
四　アジア太平洋経済圏との接触　203
おわりに　207

第二部　南アジアと地域ネットワーク

第九章　イギリス植民地支配の拡張とインド人ネットワーク……水島　司　215
——インド人金融コミュニティーと東南アジア
はじめに　215
一　ナットゥコッタイ・チェッティヤールと英領マラヤ　219
二　パクス・ブリタニカとインド人金融ネットワーク　230
まとめ　233

第一〇章　交差するインド系ネットワークと華人系ネットワーク……濱下武志　239
——本国送金システムの比較検討
はじめに——移民問題と現代世界　239
一　移民研究の新たな課題　241
二　移民と本国送金に見るインド系と華人系の比較　244
三　ネットワークとその原理　245
四　交差するネットワークの歴史的展開　249
五　本国送金と金融ネットワーク　251
六　交差するネットワークの諸類型と相互関係　266
おわりに——非制度的ネットワークの活発化　270

第一一章　アジア通商網のなかの南アジアと戦前期日本……籠谷直人　275
一　綿関係製品を通した南アジアと戦前期日本との関係　275
二　一九二〇年代までの日本と南アジアの通商関係——インド棉花輸入を中心に　277
三　一九三〇年代のアジア国際通商秩序　283
四　一九四〇年代のインド商人——まとめにかえて　295

第一二章　南アフリカのインド系移民……大石高志
——商人・移民のネットワークと植民地体制との交差と相補　299
はじめに——地域とネットワーク　299
一　パクス・ブリタニカと南ア・インド系移民社会の成立　301
二　補完するネットワーク——宗教、文化、思想　308
三　アパルトヘイト制度下の移民社会とネットワーク　315
むすびにかえて——ポスト・アパルトヘイト期のインド系住民社会　318

第一三章　シンガポールの中国系・南アジア系移民……田中恭子
——国民統合過程を中心に　327
はじめに　327
一　移民過程とコミュニティーの発展　328
二　英語を共通語とする国民統合　332
三　移民の国籍問題　336
四　PAP政権下の国民統合　338
五　移民ネットワークの変容——結論にかえて　341

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一四章　グローバリゼーション下の在日インド人社会……澤　宗則・南埜　猛　347
——エスニック集団と「場所」との再帰的関係
はじめに　347
一　エスニック集団と「場所」との再帰的関係の枠組み　347
二　在日インド人の社会経済的特質　352
三　エスニック集団と「場所」　362
索　引

現代南アジア

6 世界システムとネットワーク

はじめに

秋田茂
水島司

本書は、「世界システムとネットワーク」の観点から、南アジア地域の対外関係を解明することを目的としている。従来の南アジア研究においては、主として、インド亜大陸内部の個別的な地域研究に関する業績が積み重ねられてきており、旧植民地宗主国であるイギリスとの関係は別としても、隣接諸地域との関係や、グローバルな政治経済システムのなかでの南アジアの位置と役割を考察しようとする研究姿勢は一般的に弱く、南アジアを閉鎖的に捉えがちであった。本書の意義は、こうした研究動向への最近の反省の動きをさらに進め、世界秩序と国際経済・情報のネットワークのなかで、現代南アジアの構造変動の意味を考察する点にある。

本書では、まず第一部で、南アジア地域と世界経済・国際政治との関係、南アジアと世界システムとの構造的連関を考察する。そこで問われているのは、グローバルに展開する世界システムのなかで、南アジアは政治・経済的にどのように位置づけられてきたのか、二〇世紀から二一世紀にかけての世界システムの変容のなかで、南アジアはいかなる影響を受けてきたのか、世界経済の変容とインドの経済自由化政策とはどう関連しているのか、サブ・システムとしての「アジア間貿易」の発展や、ＡＰＥＣに象徴されるアジア太平洋経済圏の興隆は南アジアとどのような関係をもっているのか、などの諸点である。そこではさらに、国際政治面における冷戦体制と脱植民地化の関連、冷戦終

結後の国際秩序と核拡散問題、九・一一テロ事件以降の国際テロリズム、反テロ戦争と南アジア地域との関連などの問題が考察されるであろう。

ところで、南アジア地域は、こうしたグローバルに展開する国際政治・経済システムのなかで、単に受動的な存在であったわけではない。第二部で明らかにするように、南アジア世界のさまざまな事象は、南アジアの内と外とを結ぶヒト、情報、アイデンティティーの網の目、ネットワークのなかで展開してきた。そこでは、国家を前提にし国家領域を単位にした「領域性のネットワーク」と、世界各地に展開するインド人商人やシリコンバレーのＩＴ産業従事者のように、国家領域から自由な、あるいは国家領域を通貫した関係性を基軸としたつながりである「関係性のネットワーク」が、相互に密接に絡み合いながら能動的に機能してきた。

このような南アジア地域に関係するネットワークは、グローバルに展開する世界システムと連関し、前者は後者が提供する基盤・枠組みのなかで機能し、あるいは、その枠組みに変更を迫った。一九世紀末から二〇世紀前半の「パクス・ブリタニカ」のもとで、鉄道建設やプランテーション・鉱山の開発が進み、その経済開発に伴う労働力として多数のインド人が年季契約労働者として世界各地に移動・移住した。その際パクス・ブリタニカが提供した国際公共財（国際法、電信・蒸気船航路網などのインフラ、基軸通貨、自由貿易体制など）を通じて、南アジアのネットワークは確実に広がっていった。その意味で、世界システムと南アジアのネットワークは、相互に補強しあう関係にあった。他方、それらの移民が移動先の国民国家形成に関わり、世界システムの改変を迫る事態をもたらしたことも忘れてはならない。なお、本書は、文部省特定領域研究「南アジア世界の構造変動とネットワーク」の下で組織された共同研究、「南アジアと世界システム」および「環インド洋世界とネットワーク」研究班の成果の一部である。同研究に参加された多くの方々に対し、記して謝意を表したい。

第一部　南アジアと世界システム

グローバリゼーションの急速な進展のなかで、モノ・ヒト・カネ・情報それぞれの側面で「世界の一体化」が進んでいる。たとえば、世界中のＩＴ産業がインドの優秀なシステムエンジニアを雇用しようと躍起になり、アメリカ合衆国ではすでに数十万人のインド人技術者が活躍している現実がある。また、国際政治面では、世界を震撼させた二〇〇一年九月一一日の対米テロ事件が反テロリズムの国際的連帯を生んだが、パキスタン政府は、アメリカ政府の経済制裁解除を前提にした対アフガン軍事協力要請と、国内世論の反発との板挟みで苦境に陥っている。このように、世界経済と国際政治の両面で、南アジア地域といえどもグローバリゼーションの渦に巻き込まれており、一国単位の国民国家や国民経済をベースにした分析の枠組みがもはや通用しない事態に、現在私たちは直面している。今や、対外的な国際関係の考察、世界経済と国際政治の両面から成る世界システムとのつながりを抜きにしては、南アジア地域の理解は不可能な状況にある。

こうした現状をふまえて、本書の第一部では、南アジア地域と世界経済・国際政治との関係、南アジアと世界システムとの構造的連関を考察する。本書の第二部で論じるネットワークが機能する基盤・枠組みとなる世界システムの構造と、現代の南アジア地域との関係を明らかにするのが第一部の目的である。

現代南アジアの構造変動を考察する際に、本書第一部では、相互に関連しあった以下の三つの観点に留意しながら考察を進めている。

第一は、二〇世紀全体をながめた歴史的展開を重視する観点である。一九九一年以降の経済自由化政策によるインド経済・社会の変容を考える際には、一九四七年のインド・パキスタン分離独立からのほぼ半世紀を射程に入れて、

国内の政治経済政策の展開を考察するのが一般的であろう。しかし本書では、南アジア地域を世界システム、対外関係との関連でいわば「外側から」考察することを主目的にしているため、時間的な分析対象の時期を、さらにさかのぼって二〇世紀全体に拡張している。近代世界システムには、そのシステムを支える基軸国となるヘゲモニー国家が必要である。南アジアとの関連で歴史的に見れば、一九世紀後半から二〇世紀前半のイギリスによる世界支配＝「パクス・ブリタニカ」(Pax Britannica) と、第二次世界大戦から現代にいたるアメリカ合衆国の強大な影響力の行使＝「パクス・アメリカーナ」(Pax Americana) がそれに相当する。二〇世紀の世界システム自体が、パクス・ブリタニカからパクス・アメリカーナへと大きく変容するなかで、南アジア地域はどのように位置づけられるのか。本書では、あえて一世紀のタイムスパンで二〇世紀全体を考察することによって、世界システムにおける南アジア地域が果たした歴史的役割を浮き彫りにしようと試みている。

第二の観点は、現代のパクス・アメリカーナとの関連、特に、ヘゲモニー国家であるアメリカ合衆国の世界戦略のなかで南アジアがどのように位置づけられ、南アジア諸国はそれにどう対応してきたのか、また、一九九〇年代以降の現状はどうなのかという問題である。第二次世界大戦後のアメリカ合衆国のヘゲモニーと冷戦に関しては数多くの研究があるが、ヨーロッパ地域や東アジア・東南アジア地域の研究に片寄っており、なぜか南アジア地域との関係を扱った内外の先行研究はほとんど存在しない。その意味で、本書で取り上げた南アジア＝アメリカ関係の分析は、世界システム論研究にとっても先駆的研究として画期的な意義を有している。史料的制約により、考察の重点はアメリカの外交政策に置かれているが、必要に応じて世界経済と国際政治との関連にも言及している。また、従来の戦後史研究で重視されてきたソ連（ロシア）が果たした役割については、その国際政治面での影響力を考慮しつつも、世界システム内部におけるソ連の「半周辺」的位置、特に、世界経済に対する影響力とリンケイジの弱さを勘案して、本書ではパクス・アメリカーナとの関連で副次的に扱われている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com